

佐藤喜代治博士略年譜并略著作目録

佐藤 武 義 編

本稿は、佐藤喜代治先生卒寿を祝う「西行の会」編『佐藤喜代治先生年譜并著作目録』（平成14年9月19日）によって、主要な年譜と著作目録（主に著書と論文）をまとめた。上記の「年譜」は加藤正信氏の作成であり、「著作目録」は私の作成である。詳細は同書によらねたい。

略年譜

- 大正元年9月19日 宮城県宮城郡根白石村（現仙台市泉区）に生まれる
- 大正8年4月 仙台市木町通尋常小学校入学
- 大正14年4月 宮城県第二中学校（現仙台第二高等学校）入学
- 昭和4年4月 第二高等学校（旧制）文科甲類入学
- 昭和7年4月 東北帝国大学法文学部文科入学
- 昭和10年3月 東北帝国大学法文学部文科（国語学専攻）卒業
- 昭和10年4月 宮城県白石中学校（現白石高等学校）嘱託教員
- 昭和10年8月 宮城県白石中学校教諭（昭和13年3月まで）
- 昭和13年3月 建国大学助教授（昭和17年1月まで）
- 昭和17年10月 神宮皇学館大学助教授（昭和21年3月まで）
- 昭和19年3月 国語学会創立とともに同学会評議員（昭和60年まで）
- 昭和23年8月 東北大学法文学部助教授、国文学第二講座（昭和29年国語学国文学第二講座と改称、同38年国語学講座と改称）所属
- 昭和24年4月 法文学部からの文学部分立に伴い文学部助教授
- 昭和25年4月 国立国語研究所宮城地方調査員（昭和28年8月まで）
- 昭和26年4月 東北大学文学部教授、国文学第二（国語学）講座担任
- 昭和26年12月 国立国語研究所兼任所員（昭和34年3月まで）
- 昭和28年4月 東北大学大学院文学研究科担当
- 昭和29年4月 宮城県視学委員（昭和47年まで）
- 昭和31年6月 東北地区国語教育研究協議会会長（平成7年まで）
- 昭和32年6月 宮城県中高国語科連絡協議会会長（平成7年まで）
- 昭和32年10月 日本文芸研究会代表委員（昭和47年まで）

- 昭和36年10月 国語審議会委員（昭和46年6月まで）
- 昭和37年3月 文学博士の学位取得
- 昭和39年3月 文部省在外研究員としてアメリカ合衆国（ミシガン大学）へ出張（昭和40年3月まで）
- 昭和39年10月 国語学会理事（昭和54年6月まで）
- 昭和40年4月 東北大学評議員併任（昭和44年10月まで）
- 昭和42年10月 東北大学文学部長，東北大学大学院文学研究科長（昭和44年10月まで）
- 昭和44年1月 日本学術会議会員（昭和47年1月まで）
- 昭和47年7月 国文学研究資料館評議員（昭和61年まで）
- 昭和49年11月 財団法人日本古典文学会評議員（平成12年6月まで）
- 昭和50年11月 宮城県教育功労者として表彰
- 昭和51年4月 停年により東北大学退官，東北大学名誉教授
- 昭和51年4月 聖和学園短期大学教授（昭和52年3月まで）
- 昭和52年3月 フェリス女学院大学客員教授（平成元年3月まで）
- 昭和54年1月 国立国語研究所評議員（平成6年まで）
- 昭和56年7月 新村出記念財団評議員（平成12年まで）
- 昭和59年11月 叙勲（勲2等旭日重光章受章）
- 昭和63年5月 国語学名誉会員に推挙される
- 平成4年度 国立国語研究所評議員会会長（平成6年まで）
- 平成9年1月 河北文化賞受賞
- 平成15年5月7日 肺炎により死去。満九十歳。

略 著 作 目 録

著書・編共著書

- 『日本語の精神』（畝傍書房，昭和19年1月）
- 『国語学概論』（角川書店，昭和27年6月）
- 『教科日本文法要説 現代語編』（日本書院，昭和35年11月）
- 『日本文法要説 古語編』（上・下）（日本書院，昭和37年6月）
- 『国語学要説』（編著，朝倉書店，昭和41年5月）
- 『日本文学史の研究』（明治書院，昭和41年10月）
- 『国語史』（上・下）（編著，桜楓社，昭和45年4月～46年4月）
- 『国語表現法』（編著，朝倉書店，昭和46年3月）
- 『国語語彙の歴史的研究』（明治書院，昭和46年11月）
- 『講座国語史6 文体史・言語生活史』（編著，大修館書店，昭和47年3月）
- 『日本文法——理論と教育——』（明治書院，昭和48年10月）

- 【シンポジウム日本語1 日本語の歴史】(共著, 学生社, 昭和50年10月)
- 【日本文法要論】(朝倉書店, 昭和52年4月)
- 【国語史要説】(共著, 朝倉書店, 昭和52年8月)
- 【国語学研究事典】(編著, 明治書院, 昭和53年11月)
- 【日本の漢語】〈角川小辞典28〉(角川書店, 昭和54年10月)
- 【講座 日本語の語彙】(全12巻)(編著, 明治書院, 昭和56年11月~58年11月)
- 【暮らしことばの辞典】(編著, 講談社, 昭和60年1月)
- 【字義字訓辞典】〈角川小辞典4〉(角川書店, 昭和60年1月)
- 【国語論究】(1~10)(編著, 明治書院, 昭和61年5月~平成14年12月)
- 【漢字講座】(全12巻)(編著, 明治書院, 昭和62年11月~平成元年9月)
- 【漢字の泉】(共著, 河北新報社, 平成3年7月)
- 【統漢字の泉】(共著, 河北新報社, 平成4年7月)
- 【統々漢字の泉】(共著, 河北新報社, 平成5年7月)
- 【『色葉字類抄』(巻上・中・下)略注】(明治書院, 平成7年3, 4, 7月)
- 【漢字百科大事典】(編著代表, 明治書院, 平成8年1月)
- 【気く一語の辞典】(三省堂, 平成8年3月)
- 【漢語漢字の研究】(明治書院, 平成10年5月)

論文

- 【音韻学の研究とその応用に就て(訳)——トルベッコイ(Trubetzkoy)公爵の所見——】(『国語研究』第1巻第3号, 昭和8年11月)
- 【本居宣長の国語音韻説】上・下(『国語研究』第3巻第4, 5号, 昭和10年4, 5月)
- 【音韻研究の立場】(『文化』第10巻第5号, 昭和18年5月)
- 【句成立の問題】(『文化』第10巻第6号, 昭和18年6月)
- 【言語過程説についての疑問】(『国語学』第2輯, 昭和24年6月)
- 【言語に於ける意味について】(『文化』復刊第1巻第3号, 昭和24年6月)
- 【言語変化の研究】(『文芸研究』第4集, 昭和25年6月)
- 【新撰字鏡の本文について】(『東北大学文学部研究年報』第1号, 昭和26年3月)
- 【語彙】(『国語教育講座II 言語構造』, 刀江書院, 昭和26年3月)
- 【源氏物語に見られる言語思想】(『文芸研究』第7集, 昭和26年5月)
- 【色葉字類抄考証第一】(『文化』第16巻第1号, 昭和27年1月)
- 【色葉字類抄考証第二】(『文芸研究』第11集, 昭和27年10月)
- 【大槻・山田文法の特集】(『国文学解釈と鑑賞』第17巻第12号, 昭和27年12月)
- 【平家物語と記録体の文章】(『文芸研究』第15集, 昭和28年12月)
- 【色葉字類抄考証第三】(『東北大学文学部研究年報』第4号, 昭和28年12月)

- 「標準語と方言」(『実践国語』第15巻第165号, 昭和29年6月)
- 「文章論の成立について」(『国語学』第18輯, 昭和29年11月)
- 「待遇表現」(『万葉集大成』6, 平凡社, 昭和30年5月)
- 「言語活動の指導としての国語教育」(『国語学』第22輯, 昭和30年9月)
- 「言語の理解」(『言語生活』50, 昭和30年11月)
- 「服曾比獵」(『万葉』第18号, 昭和31年1月)
- 「文章研究の意義と方法」(『国語学』第25輯, 昭和31年7月)
- 「漢字と国語」(文部省『国語シリーズ』32, 昭和31年10月)
- 「東北方言の性格」(NHK国語講座『方言の旅』第3巻第2号, 昭和32年4月)
- 「漢語雑考」(『文化』第21巻第4号, 昭和32年7月)
- 「文章論の諸問題」(『日本文法講座I 総論』, 明治書院, 昭和32年11月)
- 「未然形につづく助動詞」(『国文学解釈と鑑賞』第21巻第11号, 昭和32年11月)
- 「方言の中に見られる漢語」(『聖和』2, 昭和32年11月)
- 「東北のことば」(1~6) (『東北放送』44~49号, 昭和33年1~6月)
- 「助詞にはどんなテーマがあるか——卒業論文を書く方々のために——」(『国文学解釈と鑑賞』第23巻第4号, 昭和33年4月)
- 「国語の語彙の特色」(『国語教育のための国語講座』4, 朝倉書店, 昭和33年4月)
- 「文章研究の意義と方法」(『続日本文法講座3 文章論』, 明治書院, 昭和33年7月)
- 「文章の変遷」(『講座現代国語学』III, 筑摩書房, 昭和33年7月)
- 「山田孝雄先生を追慕して」(『国語学』第36輯, 昭和34年3月)
- 「主題・筋・段落・文脈」(『国文学解釈と鑑賞』第24巻第7号, 昭和34年7月)
- 「送りがなの意義」(『東北放送』63号, 昭和34年8月)
- 「江・講・絳韻所属漢字の字音かなづかひ」(『文化』第23巻第3号, 昭和34年12月)
- 「古典解釈と敬語法」(『国文学解釈と教材の研究』第5巻第2号, 昭和35年1月)
- 「文法の変遷と古典解釈の方法」(『講座解釈と文法I 総論』, 明治書院, 昭和35年1月)
- 「太平記の文章」(『国語と国文学』第37巻第4号, 昭和35年4月)
- 「文章論の発生と展開」(『国文学解釈と教材の研究』第5巻第9号, 昭和35年7月)
- 「中世語」(『文学・語学』第17号, 昭和35年10月)
- 「東部方言の語彙 北海道・東北」(『方言学講座』第2巻, 東京堂, 昭和36年3月)
- 「『御堂閔白記』の文章から」(『文芸研究』第37集, 昭和36年3月)
- 「放送と敬語」(『東北放送』91, 昭和36年12月)
- 「方言に残る方言」(『国文学解釈と鑑賞』第27巻第2号, 昭和37年3月)
- 「国語学とはどんな学問か——方言——」(シンポジウム) (『国語学』第50集, 昭和37年9月)
- 「近世における漢語の語形変化」(『文化』第26巻第3号, 昭和37年11月)
- 「西鶴の小説における用字についての試論」(『東北大学文学部研究年報』第13号, 昭和38

年3月)

- 「イウからユウへの転化の問題」(『国語学研究』3, 昭和38年6月)
- 「係り結び」(『国文学解釈と鑑賞』第28巻第7号, 昭和38年6月)
- 「語彙史の問題」(『国語学』第53集, 昭和38年6月)
- 「漢語存疑」(『山田孝雄追憶 史学・語学論集』, 宝文館, 昭和38年11月)
- 「文構造から見た芭蕉の俳文」(『文化』第27巻第4号, 昭和39年2月)
- 「現代語の語彙の形成」(『講座現代語2 現代語の成立』, 明治書院, 昭和39年3月)
- 「アメリカにおける日本語の教育と研究」(『文化』第29巻第3号, 昭和40年12月)
- 「上代の記録体の文章における用字法」(『日本文化研究所研究報告』第2集, 昭和41年3月)
- 「日本文法理論における方法論についての考察」(『東北大学文学部研究年報』第16号, 昭和41年3月)
- 「日本文法の研究法」(『国語学』第66集, 昭和41年9月)
- 「漱石の文章についての覚え書」(『文芸研究』第54集, 昭和41年11月)
- 「古典解釈と助詞」(『国文学解釈と教材の研究』第12巻第2号, 昭和42年1月)
- 「橋本左内の書簡に見える漢語について」(『国語と国文学』第44巻第4号, 昭和42年4月)
- 「三兵吾古知幾」の漢語」(『国語学研究』7, 昭和42年8月)
- 「和歌と言語」(『和歌の世界』, 桜楓社, 昭和42年11月)
- 「日本の文章の特質」(『国文学解釈と教材の研究』第13巻第2号, 昭和43年1月)
- 「聞く生活の歴史」(『言語生活』198, 昭和43年3月)
- 「日本語表記の歴史——かなまじりの文章を中心にして——」(『ことばの宇宙』第3巻第4号, 昭和43年4月)
- 「『学生』『学匠』並びに『書生』」(『文化』第32巻第1号, 昭和43年7月)
- 「漢語の源流——『万法精理』の訳語について——」(『文芸研究』第60集, 昭和43年11月)
- 「複合語・転成」(『月刊文法』第1巻第1号, 昭和43年11月)
- 「文章史の観点」(『月刊文法』第1巻第3号, 昭和44年1月)
- 「中世の国語」(『講座 日本文学』6, 三省堂, 昭和44年1月)
- 「中世語法の特徴と解釈上の日本文法」(『国文学解釈と教材の研究』第14巻第7号, 昭和44年5月)
- 「読むことの歴史」(『言語生活』221, 昭和44年2月)
- 「頼山陽の書簡に見える漢語について」(『国語と国文学』等47巻第10号, 昭和45年10月)
- 「助詞の史的展開」(『国文学解釈と鑑賞』第35巻第13号, 昭和45年11月)
- 「『万法精理』の訳語について(続)」(『国語学研究』10, 昭和45年12月)
- 「中世の漢語についての一考察」(『国語学』第84集, 昭和46年3月)
- 「文字・表記法の基準」(『講座 正しい日本語』第3巻, 明治書院, 昭和46年5月)
- 「近代の語彙1」(『講座国語史』3, 大修館書店, 昭和46年9月)

- 「文法論の課題 品詞の分類と文法」(『国語学』第90集, 昭和47年9月)
- 「助詞の分類——明治以後——」(『品詞別日本文法講座』9, 明治書院, 昭和48年2月)
- 「語源をたずねて——漢語——(1)『仰に』『仰仰しい』『仰山』, (2)『床子』『大床子』, (3)『個人』という語, (4)『馬鹿』, (5)『ほうとう』『はつと』の話」(『日本国語大辞典』ことばのまど)(月報), 昭和48年3月～昭和50年9月)
- 「『五燈会元』の語彙の考察——わが国近代の漢語との関連において——」(『国語学研究』13, 昭和49年1月)
- 「『楓』および『桂』についての若干の考察」(『倉野憲司先生古稀記念古代文学論集』, 桜楓社, 昭和49年9月)
- 「山田孝雄」(『新・日本語講座』9, 汐文社, 昭和50年4月)
- 「正書法の歴史的背景——江戸期まで——」(『言語』第4巻第9号, 昭和50年9月)
- 「漢字はどのように伝来しその当初どのように用いられたか」(『海外交渉史の視点』1, 日本書籍, 昭和50年10月)
- 「文字・表記における正しさは」(『言語生活』289, 昭和50年10月)
- 「言語は変化する」(『新・日本語講座』4, 汐文社, 昭和50年11月)
- 「近代語の形成——「浮雲」を中心に——」(『文芸研究』第81集, 昭和51年2月)
- 「古文書の文体」(『古文書学入門』〈書の本日本史9〉, 平凡社, 昭和51年3月)
- 「『餅』の字義について」(『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』, 桜楓社, 昭和51年6月)
- 「日本の人名の歴史」(『言語生活』302, 昭和51年11月)
- 「『悉曇蔵』における漢音・呉音」(『国語学』第108集, 昭和52年3月)
- 「文章観の変遷」(『現代作文講座』8, 明治書院, 昭和52年5月)
- 「日本語の歴史と構造——日本語の歴史的変遷——」(『伝統と現代』45, 昭和52年5月)
- 「平安時代の言語生活 話すと聞くとの関係」(『国語学』第112集, 昭和53年3月)
- 「語義の研究——「ひをむし」の例——」(『日本の言語学』第5巻月報, 昭和54年1月)
- 「日本語における清濁の起源」(『言語』第8巻第1号, 昭和54年1月)
- 「『法苑珠林』と記録体」(『文芸研究』第90集, 昭和54年1月)
- 「『提綱答古知幾』の語彙」(『国語学』第123集, 昭和55年12月)
- 「漢字字訓の研究——扱・掲・激・控・溝・棧について——」(『国語学研究』20, 昭和55年12月)
- 「漢字字訓の研究・序説」(『フェリス女学院大学紀要』16, 昭和56年3月)
- 「漢字と日本語」(『山梨英和短期大学創立十五周年記念国文学論集』, 笠間書院, 昭和56年10月)
- 「和語の諸相」(『言語生活』359, 昭和56年11月)
- 「日本文化と日本語の語彙」(『講座 日本語の語彙』2, 明治書院, 昭和57年1月)
- 「和製漢語の歴史」(『講座 日本語学』4, 明治書院, 昭和57年1月)
- 「日本における漢字使用の歴史」(『「コトバ」シリーズ』16, 文化庁, 昭和57年3月)
- 「語彙の歴史」(『講座 日本語の語彙』3, 明治書院, 昭和57年5月)

- 「しぜん〈自然〉, そば〈蕎麦〉」(『講座 日本語の語彙 10, 語誌II』, 明治書院, 昭和58年4月)
「字訓と仮名」(『言語生活』378, 昭和58年6月)
- 「山田孝雄伝」(1)~(3) (『日本語学』第2巻第12号, 第3巻1, 2号, 昭和58年12月, 昭和59年1月, 2月)
- 「ことばと辞書との間」(『言語生活』388, 昭和59年4月)
- 「ことばの謎—敬語のなぞ—」(『国文学解釈と教材の研究』第29巻第6号, 昭和59年5月)
- 「私の日本語教育」(『言語』第14巻第9号, 昭和60年9月)
- 「中古語漫言」(『日本語学』第4巻第11号, 昭和60年11月)
- 「色葉字類抄」続考略第一」(『国語論究』1, 昭和61年5月)
- 「方言と国語教育」(『講座方言学』3, 昭和61年5月)
- 「ゆづりは考」(『日本文芸論集』15・16, 昭和61年12月)
- 「日本語における漢語の座」(『日本語学』第6巻第2号, 昭和62年2月)
- 「漢字と日本語」(『漢字講座』3, 明治書院, 昭和62年11月)
- 「色彩語管見」(『日本語学』第7巻第1号, 昭和63年1月)
- 「日本の漢字と中国の漢字」(『漢字講座』1, 明治書院, 昭和63年5月)
- 「漢字の字義・字訓」(『漢字講座』1, 明治書院, 昭和63年5月)
- 「言語感覚ということ」(『日本語学』第7巻第8号, 昭和63年8月)
- 「謡曲における仏教語」(『国語学』第154集, 昭和63年9月)
- 「漢字字訓の研究—徇・貫・殆・掬について—」(『玉藻』24, 平成元年3月)
- 「『本朝文粹』の和訓」(『文芸研究』第122号, 平成元年9月)
- 「色葉字類抄」続考略第二」(『国語論究』2, 平成2年2月)
- 「私の五十音図観」(『日本語学』第9巻第2号, 平成2年2月)
- 「『柏』『樗』の字訓」(『玉藻』25, 平成2年3月)
- 「手紙のことば—候文の性格—」(『日本語学』第9巻第8号, 平成2年8月)
- 「色葉字類抄」続考略第三」(『国語論究』3, 平成3年10月)
- 「語彙(史的研究)」(『国語学の五十年』, 武蔵野書院, 平成7年5月)
- 「平安遺文の用字用語若干」(『フェリス女学院国文学論叢』, 平成7年6月)
- 「和刻本『漢書』の和訓—「色葉字類抄」との関連において—」(『玉藻』36, 平成12年5月)
- 「和刻本『漢書』の和訓・続考—「色葉字類抄」との関連について—」(『国語論究』8, 平成12年11月)
- 「『未刊謡曲集』のことば」(『山梨英和短期大学創立三十五周年記念日本文芸の表現史』, おうふう, 平成13年10月)
- 「表現を考える」(『現代日本語講座』第2巻, 明治書院, 平成13年12月)
- 「菊沢季生と位相論」(『国語論究』9, 平成14年1月)